

2022 年度春学期授業アンケート 学部長コメント

【文学部の調査結果に関するコメント】

文学部長 寺田 俊郎教授

文学部全体の授業評価は、全学の授業評価の平均とほぼ一致している。他学部特に遜色がないという意味では肯定的に捉えられるが、明らかな特色がないという意味では素直に喜べないところがある。

わずかな差が見られるのは、Q4、Q5 で全学の平均を 0.2 点下回っているところである。Q4 のアクティヴ・ラーニングに関して言えば、文学部の学科の中には全学の平均を上回っているところもあり、学部全体としてはそれほど問題はないと思われる。しかし、学科長の論評の中には、この傾向を危惧するもの、また何らかの工夫の必要性を表明するものもあると同時に、十分な基礎知識がない段階でのアクティヴ・ラーニングの意義に疑義を呈するものもある。これらはいずれも考慮すべき論点だと考えられる。

Q5 の科目の応用可能性について言えば、いわゆる「実用的な」学ではない科目を多く開講している文学部としては、むしろ驚くほど点数が高いと言わねばならないと思う。それぞれの分野の意味を伝えようとする教員の姿勢とその意味を見抜く学生の見識の高さを反映しているとも考えられる。

しかし、そう楽観視することもできなとも考えられる。Q5 のような質問項目は、文学部の科目の多くにそもそも馴染まないのではないのではないかと、とも考えられる。なぜなら、本学の基盤教育が前提としているように、各専門分野の応用可能性は、それ相応の教養がない限り、真の意味で認識されようはずがないからである。そうすると今回の結果も、学生の真の見識を示すものではないことになる。

また、Q1 の点数は全学平均と同じだが、果たしてこれを肯定的に捉えるべきかどうかとも考えてみなければならない。授業が「わかりやすい」ということは「困難な課題に挑戦する機会がない」「苦難を乗り越えて学の高み・深みを経験する機会がない」という意味かも知れないからである。

こうして評価結果とそれに関する学科長の論評を通覧して考えると、授業の改善点も析出されるが、同時にアンケートの問題点も炙り出される。単純に評価結果に従って授業を改変するような愚を犯さないように留意する必要がある。

なお、回収率の低さについて、学科長から、学生が数多くのアンケートに回答することを迫られて食傷気味であることが理由との意見があった。耳を傾けるべきであろう。

2022 年度春学期授業アンケート 文学部選出 FD 委員コメント

【文学部の調査結果に関するコメント】

文学部選出 FD 委員 服部 隆教授

【結果に対するコメント】

今年度から、全学的なアンケート実施に体制が切り替わった。質問項目が変わり、出てくる結果にも、一部に相違が見られる。

全体的に見て、Q4 を除き、大学全体の平均と大きく乖離はしなかった。また、「教員の意欲を感じた」に対する回答も「とてもよくあてはまる」が全学科で 60% を超えている。したがって、各教員の授業運営にあたっての土台については、問題ないと考える。

一方、アクティヴ・ラーニングに関する Q4 については、低い値の出た学科が多かった。ただしこれも、演習やゼミのようなタイプの授業では、必ずしも低評価だったわけではないので、文学部の教員がアクティヴ・ラーニングに消極的というよりも、授業のタイプに合わせてアクティヴ・ラーニングを適宜実践しているという方が、実態に合っていると思う。

また、講義科目についても、学生の学ぶ動機付けを行ったり、主体的に学ぶ態度を身につけさせたりするために、今後も工夫を行っていくことは必要である。さらに努力を重ねたい。

【今後の課題】

2025 年度には、新しい学習指導要領で学んだ学生が入学してくる。授業の実施方法のみならず、必要があれば、カリキュラム全体で工夫できることがないかについても、2023 年度は検討していく必要があると思う。

また、授業アンケートの調査項目についても、授業のタイプや開講年次によって、適宜、質問を入れ替える必要があるかもしれない。

分かりやすい授業ばかりが必ずしも学生にとって有益なのではない。なぜなら、学生が卒業した後に分け入っていく社会は、「わかりにくい」ことだらけだからである。一度聞いても分からない問題を、1～2 年かけながら考えていくようなタイプの授業も、高学年においては、併せて必要と考える。

【哲学科】

哲学科長 長町 裕司教授

調査結果の全体的傾向としては、大学全体全学部の平均値より哲学科の各設問事項の平均値が劣ることもなく、或る設問（アクティブラーニングなどを問う設問 4 や論理的・客観的な思考力を問う設問 7、教員との質疑応答や教員からのフィードバックの機会を問題とする設問 3 など）では大学全体および文学部全体よりも相当に上回る評価結果が見られたことは肯定的なものと査定できる。他方、授業での説明のわかりやすさ（設問 1）や授業内容を卒業後に応用することを学ぶ機会（設問 5）などは、哲学を学ぶ学生にとって宿命として臨む克服し難い困難さと密接に関連するが、さらに多くの学生に良き糧となり得る授業を目ざして工夫と錬成を心がけてゆくようにしたい。

【史学科】

史学科長 北條 勝貴教授

学生による評価は概ね全学の平均値と一致しているが、Q4 のみ低い結果になっており、主に講義科目において、アクティヴ・ラーニングへの取り組みの後れが露呈している。これについては、改善を期そうという教員がいる一方で、歴史学の講義科目においては取り入れが難しい、あるいは相応しくない、という意見も根強い。初年次向けの概説などについては、小課題を設定して学生間で討論させるなどの機会があったほうが、知識やスキルの定着が見込めるかもしれない。しかし、100 名を超える受講生を相手にどう実施するのが効果的か、課題や困難も多い。高校においては歴史総合という思考型の授業がスタートし、入試もそれに対応する形式へ変わり始めている。初年次教育や高大連携の観点からも、歴史学というディシプリンにおける大学の授業のあり方について、抜本的に見直すべき時期に来ているのかもしれない。すでに学科内で稼働しているワーキング・グループにおいて、検討課題としてゆきたい。なお、個々の授業においては、受講生それぞれの状態に応じたきめ細やかなフィードバック、パワーポイントや配付資料のさらなる改善、オンデマンド授業に用いる動画の品質向上、独自の成績評価可視化の試みなど、担当教員による真摯な取り組みが続行されている。

また今回は、全学的な学習視覚化の試みに連動させ、当該アンケートのあり方自体を改革してゆくべきではないか、ICT を積極的に活用しより効果的な形へ更新してゆくべきではないか、との意見もあった。一方で、学生はたくさんのアンケートに回答することを強いられ、やや食傷気味になっている印象もある（回答率の低下はそのためもある）。学生側の需要をどう捉えかかる仕組みへ反映させてゆくかも含め、改善してゆく余地がある。

【国文学科】

国文学科長 福井 辰彦教授

各授業とも特段問題すべきネガティブな評価は出ておらず、その意義や成果についておおむね理解を得られている。

授業の特性によりどうしても低い評価となる設問もある点、教員側には疑問や戸惑いがあるようだ。

学生参加型の授業実施については、各教員ともその必要性を理解し、実践に努めているところではあるが、学問の特質上、読む技術・調べる方法の伝授が必須であるほか、昨今の学生の教養や読書経験の乏しさから、基礎的な知識の教授も必要性が高まっており、困難な部分もある。そもそも中身が空っぽの人間に、学問的な意見表明や議論ができるわけがない。「アクティブ・ラーニング」とやらが、全うで有意義な学問的实践となるには、そのい前提として、参加者個々に最低限の知識や技能が求められるべきであろう。個別の事情を勘案することなく、「発表やディスカッションをやれば良い授業」といった短絡的で幼稚な評価を下す風潮には断固として与することなく、国文学の伝統をしっかり継承発展させてゆくことが、我々の真の使命であると考えている。

【英文学科】

英文学科長 松本 朗教授

全体的に学生による授業の評価は総じてあまり悪くなかったが、英文学科全体として、今後の課題は3つあるように思われる。

1点目は、Active Learning 的な、学生参加型のディスカッション・セッションや、学生が口頭で発表をするプレゼンテーション等の課題を多く求められている傾向があることである。講義型の授業では仕方がないが、Moodle のフォーラム機能を使うことで、学生にディスカッションに参加してもらう等の工夫が必要である。演習型やスキル科目では、ディスカッションやプレゼンテーションをより多く取り入れ、学生自身が発表するだけでなく、同じ学年の学生同士で互いのプレゼンテーションを評価しあい、互いに学び合う要素を取り入れていきたい。

2点目は、1年生が高度な専門科目を履修した場合、消化不良になる傾向が見られることである。現行のカリキュラムにおいては、1,2年次で基礎力をつけ、2年生から徐々に専門科目を履修しはじめ、3、4年次で専門的な科目に集中する仕組みになっているが、それでも1年次にまったく専門的な科目がないと学生から不満がでるため、いくつかは専門科目の履修を始めてもらっている。ただ、その内容が高度すぎると、やはり1年生には理解が難しいようである。これについては、2025年度にカリキュラムを少し変更する際に考慮することとしたい。

3点目は、コロナ禍以降、Moodle で資料を配布することが増え、学生もそれに慣れつつその恩恵を理解しているが、そのいっぽうで、対面での講義科目では、紙媒体による資料配布を求める学生も一定数いることである。Moodle の活用の仕方にも教員による個人差があり、このあたりは、学科内 FD とまではいかなくとも、学科内で Moodle の活用法など、情報の共有をするほうがよいかもしれない。

上記は学生の授業評価を見た上での反省点であるが、教員が(礼儀上)学生に明確に伝えていないこととして、学生の読解力および Writing 能力(日本語・英語両方)の著しい低下がある。2023年度より新設科目 Sophomore Seminar により、学生の日本語の読解力と Writing 能力、および論理的思考力を鍛える試みを始めるが、ディスカッション能力と同等に読解力や書く力が重要であることを伝えていきたい。

【ドイツ文学科】

ドイツ文学科長 中井 真之教授

各教員がアンケート結果を踏まえて、担当科目の評価をし、必要に応じて今後の授業の取り組み方を考えていることを確認しました。

Q4 の「アクティブラーニング」の有無に関する問いですが、科目の内容（例えば、語学の授業で文法の習得・確認を目指す授業など）や手法（グループワークを行わず、一人一人にあてて練習問題を解かせるなど）によっては、必ずしも「アクティブラーニング」がその科目の目的・意図に合わない場合もあるので、一律にこれを質問項目とするのは問題があると思いました。

また、Q5 も同様の面があり、「卒業後にどのように応用されるのか」を伝えるのが難しい科目もあると思います。大学は専門学校ではないので、もう少し広い視野で見て、卒業後に直接は応用できない知識や知見が学生の考え方や物の見方、心の姿勢を培うためには必要である。学生の卒業後の活動を個々の具体的な場面ではなく、その根底・全体において支えるのに寄与する教養といったものもある、という観点も必要だと思います。

【フランス文学科】

フランス文学科長 博多 かおる教授

フランス文学科の授業アンケート結果を見ると、ほぼすべての項目において全学部平均値を上回るかそれと同等の値が出ている。特に「学生同士で議論を行ったり、プレゼンテーションをしたりする等のアクティヴ・ラーニングの機会があった」では全学部平均を上回っている。しかしそれでも 3.9 という値のため、これからも双方向の授業を意識し、充実させていきたい。また「学修した内容が在学中もしくは卒業後にどのように応用されるかを学ぶ機会があった」においてはやや平均を下回っているため、今後、授業間の連携をさらに明確化し、学びのプロセスを意識した授業の構築に努めていきたい。

【新聞学科】

新聞学科長 渡邊 久哲教授

・学科全体への評価を設問別に見たときQ2「教員の意欲を感じた」とQ3「教員からのフィードバックの機会があった」で約6割が「とてもよくあてはまる」と回答しているのは、教員の日頃の努力の賜物であると喜ばしく思う。

・学科全体への評価を全学部平均値と比較すると、大きな差は見られないが「教員からのフィードバックの機会があった」とともにQ7「クリティカル・シンキングが身につく授業だった」が平均を上回っており学科の特性に鑑みて喜ばしい結果だった。

・各科目への回答結果を見ると、総じて演習、実習系科目や実践系科目への評価が高く、理論系講義科目への評価が低い傾向がみられた。これは学生間のディスカッションやアクティブラーニング的な要素が高く評価されるためであろう。講義科目でもこれらの要素を満たしている科目の評価は高いようなので、今後は他の講義科目にもできるだけこれらの要素を取り込み、講義間で大きく差が生じないようになりたい。

・実習や実践系の学生とのやりとりが密になる科目では、学生の習熟度やレベルを把握しつつ不公平感が生じないようケアしながら授業を進めることが大事であると感じた。

・非常勤講師に関しては、特にメディアやジャーナリズムの現場に勤務する方々の授業について、Q12「受講を検討している人がいたら、勧めることができる」やQ2「教員の意欲を感じた」などの設問で非常に評価の高さが目立つ科目が複数あった。出講に至るまでの調整に苦労することもあるが、その甲斐のある結果であった。

・今回のアンケートは総じて回答率が低かった。信頼性のある分析を行うためには学生への呼びかけ等による回収率アップが必要である。

【文学部横断型人文学プログラム（文学部開講）】

文学部長 寺田 俊郎教授

学部科目（横断型人文学プログラム科目）の評価結果は、全学の平均と同等かそれ以上の項目が多く、安堵している。

ただし、Q3～Q5では全学の平均を明らかに下回っており、特にQ3では著しく下回っている。これは、一つには、横断型プログラムには輪講科目が多く、統一的な方式でフィードバックやアクティヴ・ラーニングを行ったり、当該科目の実用性に関する見解を伝えたりすることが難しいことを反映するものと考えられる。また、演習科目の多い文学部の科目にあって、横断型プログラムの演習科目は最上級の「プロジェクト・ゼミ」のみであり、少数の学生しか履修しないことも、理由の一つと考えられる。

無理をしてアクティヴ・ラーニングを形式的に取り入れることは無意味だが、知識伝達型の講義科目であっても学生の主体的な参加が授業効果を促進することは確かであり、何らかの工夫をしてみたい。

所属学科 哲学科

氏名 教員①

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

特に感想はない。

2. 今後の具体的対応策など

不満の意見はなかったので、特に具体的な改善点はない。
授業中にリアクションペーパーなどで随時、授業への要望は汲み上げている。

所属学科 哲学科

氏名 教員②

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

全体的に、平均値を上回る評価が得られたため大きな問題はないと考える。特にゼミ科目での評価はすべての項目で平均点を大きく上回った。改善を重ねてきた成果だといえる。ただし、講義科目における質疑応答 (Q3) や、アクティブ・ラーニング (Q4) の項目は、軒並み評価が低調であった。情報量の多い授業を実施しているため、特に Q4 に時間を割く余裕がなかった。

2. 今後の具体的対応策など

ゼミ科目に関しては現状を大きく変更する必要はないと考える。ただし、学生の質は毎年異なるため、その年にあったやり方を常に心がける必要がある。講義科目に関しても、おおよそ高評価を与えられており、大きな改善は不要かと考える。ただし、上記の通り、質疑応答やアクティブ・ラーニングに関しては評価が低調だったため、情報量を精査するなどして、これらに対応できる時間を確保するが求められる。

所属学科 哲学科

氏名 教員③

2022 年度春学期授業アンケート

ラテン語 1A

結果を受けてのコメント

概ね妥当な結果であると考え。本講義は、対面で行われるはずの講義であったが、途中のコロナの感染状況の悪化により、担当者の都合（ワクチン未接種）により、zoom へと切り替えた。その際の、技術的な限界により（受講者の教室での受講による雑音の混入）などで、十分な効果を上げきれなかった実感がある。

改善点

担当者のワクチン未接種状況は次年度も継続するため、具体的な改善案はにわかには思い浮かばない。ラテン語 IA については、古典語であることから、履修登録者の動機付けが明確であることも大事であり、この点はシラバスによる説明を明瞭に行うことで、ミスマッチを防ぎたい。

またアンケートへの、回答率を高める努力も行いたい。

中世哲学史

結果を受けてのコメント

概ね妥当な結果であると考え。本講義は 2020 年の全面オンデマンド、2021 年度のハイブリッドを経て、今年度に至っているが、2020 年度のオンデマンド教材(moodle 上の音源、パワーポイント)に一方では助けられ(学生の補助教材として利用)、他方で講義する側としては心理的にこれに縛られるという一面があった。

改善点

「西洋中世」という本邦にとって――現在の西欧の人間にとってさえ――なじみの薄い内容の講義であり、キリスト教の教義の知識も不可欠であることから、履修登録者には負担の大きな科目であることは承知している。しかし、これを 2 年次春学期の必修科目とすることには、学科のカリキュラム上の必要もある。この点、シラバスでの説明、2 年次用のガイダンスでの説明をしっかりと行うこと、質問時間を設定することなどで、学生の負担を軽減したいと考える。

なお、アンケートの回答率自体を高める努力も、行いたい。

以上

所属学科 哲学科

氏名 教員④

2022年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

どの授業も全般的に主旨が理解され、よい学びの機会として受け止められたように見受けられ安堵した。

ただ、少数ではあるが、批判的な自由記述があった。いずれも、普段教員として心がけていることが実行されていないことを表す内容であり、忸怩たるものがある。

2. 今後の具体的対応策など

感染症対策のため教室でマスクをしているので、外国語でのコミュニケーションにおいて相互理解が難しい場合がある。それが原因で不満が生じたと思われるところがある。まだ捗々しい対策は思いつかないが、何らかの工夫をしたい。

所属学科: 哲学科

氏名: 教員⑤

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

概ねうまくいっていると考えている。高学年教養科目である「科学技術の哲学」をオンデマンド授業にしたが、学生自身がオンデマンドの利便性をいかし、主体性をもって取り組んでくれたようで、オンデマンド授業特有のメリットもあるように思われた。

一方で、問題のある科目もあった。それは、学生が求めるレベル設定についてだ。例えば、「現代論理学」のような、いわゆる「人文系の学生」にとって敷居が高い科目の場合、「わかりやすく平易な説明を期待する学生」と「難易度の高さを期待する学生」との間に乖離が生じる。春学期の「現代論理学」は、例年とカリキュラムを変え、「実験的なカリキュラム」としたが、結果として「どっちつかず」になってしまったようである。このようなレベルの設定の問題は、その他の科目においても内在していると考えている。

その他として、アクティブ・ラーニングに関する指摘があった。アクティブ・ラーニングのあり方については、今後検討していきたい。

2. 今後の具体的対応策など

授業のレベルに関する改善方策だが、まずは初回授業時に、授業のレベル、意図について、受講生に理解してもらう必要があると考えている。もっとも、意図を理解し、授業内容を予見するには、学生にもそれなりの素養が求められるが、可能な限り、身近な例などを出し、授業の意図や意義を伝えていきたいと考えている。

次に、アクティブ・ラーニングについてだ。当然ながら、演習形式の科目では、学生の主体性が求められ、実際、学生主導で発表等を行ってもらっている。ただ、ここに問題がある。近年の「個性を重視しすぎる教育」の影響か、テキストから離れ、荒唐無稽な持論を展開する学生が増えてきている。教員が論理的整合性の欠如を指摘しても「私の考え」として撤回しない学生も少なからずいる。つまり、明らかに間違っていることを「間違っている」と認識できない学生が増加してきているのだ。アクティブ・ラーニングという理念はよいが、それを成り立たせるための基礎的な教育も忘れてはならないと考えている。

所属学科 哲学科

氏名 教員⑥

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

コメントなし

2. 今後の具体的対応策など

所属学科 哲学科

氏名 教員⑦

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

授業内容をできる限りわかり易く丁寧に伝達するという課題に関しては、大半の担当科目において進展がみられたが、1, 2 科目に関してはその内容の独自性によってか受講学生の広い層に十分にゆきわたって理解度を高める上でさらなる工夫が必要であることが自覚できた。演習科目については、ほぼすべての観点において十全な教育効果が浸透していると自己評価できると査定する。語学科目と文献講読科目については、応用性などのポイントに関して学生たちが肯定的に評価できないこと、またグループワークの取り入れが十分でないを見なすことは避けられないが、それでも授業の組み立て方を一層よく考量してより充実した内容に発展させることができると考えさせられている。

2. 今後の具体的対応策など

参考資料をさらに工夫して充実させ、イラストや図解を取り入れることが可能かを検討することも、受講学生たちの今日的なメンタリティーへの対応としての具体策と言える。また語学科目や文献講読科目においては、使用するテキストの選定を教育上の到達目的に鑑みると同時に現代の若い世代の関心も顧慮して厳選することが一つの具体的対応であるが、授業に一層メリハリをつけた組成の在り方を具体的に工夫することが大切である。

所属学科 史学科
氏名 教員①

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

・異なったねらい、異なった形態の授業を、同じ基準で受講生に評価させることに強い違和感をもった。たとえば、授業内容に強い興味・関心をもつ、ほぼ均質な受講生だけが集まる少人数の演習授業が、大人数の講義授業に比べて高い数字になるのは当然である。また、アクティブ・ラーニングが導入しやすく、その効果も発揮しやすい授業もあれば、そうでない授業もある。設問を個々の授業の特性にあわせて、柔軟に設定する工夫も必要であろう。

・ということで、当然予想できたことであるが、少人数の演習授業は評価が高く、大人数の概説授業は、それに比べて劣るということを確認した。

2. 今後の具体的対応策など

・「わかりやすい」、「面白かった」、「興味深かった」といった受講生の記述を裏切らないように、今後も努力を続けたい。

・その一方で、講義レジュメがわかりやすくできているので、むしろ学びをより深めるきっかけにならないといった、想定外の感想もあった。今後は、授業で完結する学びだけでなく、その後の自発的な学習の継続・発展を促すような工夫も取り入れていきたい。

所属学科 史学科 _____

氏名 教員② _____

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

多くの科目で学部科目平均値に近い平均値となっており、Q12・13 で高評価が得られたことに、まずは安心した。

ただ、講義科目のQ4の平均値が低く、アクティブ・ラーニングの機会が不足しているようである。

2. 今後の具体的対応策など

講義科目におけるアクティブ・ラーニングの機会を増やす方向で検討したい。

所属学科 史学科

氏名 教員③

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

アンケート項目は概ね妥当といえ、それらが事前に示されることで、意識して授業を進めることができた。結果については、授業中にいわゆる「肌感覚」で感じていたことと、大きな隔りはなかった。ただし、それが具体的な数字で示されたことには多少、有意義な面もあったといえる（ただし、数値が独り歩きする危険性があるので、絶えず批判的にみなければならぬと考える）。

不満点については、こうした「授業アンケート」が ICT をほとんど活用していない点が挙げられる。せっかく授業時間を割いて情報を收拾しているのに、教員側が経年変化を見ることができるくらいしか利用法がないのは実にお粗末に思える。学生側のポートフォリオとの連動や、授業スタイル（大人数講義からゼミ・実習型授業等）に合わせた質問項目の分岐など、データサイエンス時代に即したシステム構築を期待したい。

2. 今後の具体的対応策など

授業アンケートのみの対応ではないが、近年の社会や学生の変化に合わせて、成績評価を始めとした授業内の様々な要素を可視化して、受講生に示す試みをおこなっている。具体的には、授業参加や小テスト・課題のみならず、質問などの積極的な姿勢もポイント化し、Moodle 上で集計できるようにしている。システムの構築は多少面倒ではあるが、生成績評価を公平におこなう上で有効と考える（学生側も、この教員には最良がないと安心するようである）。

授業アンケートについては、質問項目が「概ね妥当」であると上に書いたが、すべての科目に合うように抽象化がなされており、特に低学年の学生には評価しづらい面があると思われる（例えば Q5）。授業中の特定の場面・内容が、授業アンケートのどの項目に対応しているのかは、授業担当者が明示する必要があると思われる（これはあくまでシラバスでも記載されている授業の意図の説明に関するものなので、「誘導尋問」にはあたらないと考える）。

所属学科 史学科

氏名 教員④

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

今回は、概説的な科目2つと、ゼミの一つがアンケート対象となった。
コロナ以後、パワーポイントを徹底して充実させ、授業中の板書などを極力省く方向(視聴することを主とする)で授業をしているため、学生にとっては、教員が一方向的に話すだけだという印象を強くあたえしまったかもしれないと反省している。ただし、参加者が 70 人、90 人の授業では、こうした側面もいたしかたないのではとおもっている。
評価は、自分でも驚くほど高得点だったため、デメリットだけでなく、メリットのほうも注視していきたい。
また、90 人の輪講科目(担当者が 6 名)のコーディネーターとして参加したクラスには、個人的な参加、ディスカッションのとりいれなど、工夫をする必要があると感じている。

2. 今後の具体的対応策など

具体的には、これまで蓄積してきたパワーポイントの授業資料をさらに充実すべく努力する。
また、学生らが、受け身で参加する授業形態を反省し、学生との相互のやりとりをより積極的につくる場をもうけたい。
例えば、リアクションペーパーに対するコメントをより詳細に行うなどによって、各回の課題を反省することで、学生の理解、達成などのフィードバックを多めに行うなどの措置をとりいれたい。

所属学科 史学科

氏名 教員⑤

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

●担当ゼミ（アジア本史系演習・史料講読演習）

少人数の授業で、学生とのコミュニケーションをとりながら授業を進めることができたと思う。学生ごとの特性（学習面や性格面）をきちんと把握して、各々の個性を活かせるような授業運営を心掛けていきたい。

●学科選択必修授業（アジア日本史系概説Ⅴ、アジア日本死刑特講）

中国史に対する興味や基本知識がない多くの学生に対して、学習の重要性を認識してもらい機会となるよう、工夫していきたい。「難しい」と感じる学生に対してのフォローが必要であると感じた。

●文学部横断型プログラム（ジャパノロジー概論）

横断型プログラムの選択科目にあたるが、受講生の半数はプログラムを履修していない他学部の学生である（基礎必修科目未受講）。人文学の基本を踏襲しつつ、わかりやすく伝えていく工夫が必要であると考えている。

2. 今後の具体的対応策など

●担当ゼミ（アジア本史系演習・史料講読演習）

少人数ならではの授業の特性を活かして、各授業生の興味・関心事をすくいあげ、それを「研究」として学ぶにはどうすべきか、先行研究や史料を扱いながら学ぶ時間を増やしていきたい。

●学科選択必修授業（アジア日本史系概説Ⅴ、アジア日本死刑特講）

リアクションペーパーへのフィードバックや、授業への取り込みを今以上に行う。また、講義授業内において学生自身が参加できる作業（分析作業）なども取り入れる工夫をしたい。

●文学部横断型プログラム（ジャパノロジー概論）

第1回～2回目の授業において、人文学における学び、方法について丁寧に説明して、学生に理解してもらう時間を割く。またシラバスについても、内容を今以上に具体的に記載して、受講生の理解を得られるよう工夫をしたい。

所属学科 史学科
氏名 教員⑥

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

思っていたよりも、内容、意図が理解されていた点は、安心しました。受け取る学生の皆さんの能力の高さもあります。引き続き、真摯に取り組んでいきたいと思ひます。ただ講義科目については、Q4は難しいと思ひます。

2. 今後の具体的対応策など

オンデマンド授業については、録音をチェックし、発音が不明瞭な部分の改善や文字化して示す工夫をしたいと思います。

所属学科 史学科

氏名 教員⑦

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

学生は、何だかんだ言っても私の授業のことをよく見ていると感じた。授業をしている私のほうも、悟られるところが多くあった。

2. 今後の具体的対応策など

学生から指摘があった部分についてはもう一度、よく見直し、改善策を模索したい。他方で、学生から評価されている部分については、さらに進展させていきたい。

所属学科 史学科
氏名 教員⑧

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

ゼミを除く講義科目については、概ね学科平均値を上回っているが、設問4「学生同士で議論を行ったり、プレゼンテーションをしたりする等の、アクティブ・ラーニングの機会があった」のみが低くなっている。それもそのはずで、もともと講義科目には、意図的にそのような時間を設けていない。歴史学における大人数の講義科目では、恐らく学生同士の議論の場を設けたところで、知識の定着や思考の深化に大きな効果は期待できず、むしろ専門外の学生を疎外してしまう危険性も高い（もちろん工夫の如何でそれは解消されるが、そうした労力にみあう効果があるのだろうか?）。同項目を満たすための、言い訳程度の意味しかないのではないかと考えられてならない。事実、個々の学生および全体に対して丁寧にフィードバックをしてゆくほうが重要で、自由記述の感想からも判明するとおり、それが学生同士の議論を誘発することにもなっている。史学科としては、何度かこの項目を一律に設定することに異義を唱えているが、やはり、学問の性格、授業の目的等に関連して立項すべきと考える。

2. 今後の具体的対応策など

それでも、設問にあるようなアクティブ・ラーニングの機会を設定すべきなら、現状でもギリギリの知識の供与をさらに厳選し、質・量ともにライトにする必要がある。しかし、課程科目でもある史学科の講義科目（とくに概説・通史など）は、以前に文科省からシラバス・チェックもあったように、ある程度の時間・領域をカバーすることが要請されている。その点でやはり、思い切った変化にも限界があり、アクティブ・ラーニングの要素を意味のあるレベルまで加えてゆくことは難しい。ただし、特講など担当教員の自由がある程度利く科目については、そうした抜本的な試みをしてゆくべきかもしれない。個々の授業の問題ばかりではなく、制度的な要素も強いことがらなので、学科全体で話し合ってゆきたい。なお、この2年間は複数の役職を兼職しており、100人規模の授業について、学生それぞれにフィードバック行う余裕がとれずにいた。来年度より学科長仕事からは解放されるので、この点しっかりとフォローアップしてゆければ、学生の不満を解消できるところもあろう。

所属学科 国文学科

氏名 教員①

2022年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

文学史は必修の基礎講義科目、特講は選択で発展的な内容を含む講義科目、演習は学生の発表と質疑応答を中心とする科目、というように、学科のカリキュラムとして授業の趣旨がそもそも異なるので、Q4・6・7で数値の差が出るのは必然であろう。特にこのQ4・6・7について、タイプの違う授業を一括して数値化して、学部平均値より上か下かを示されても、どう受け取ったらよいのか、やはりよく分からない。

むしろ、学科のカリキュラムの趣旨を、学生が十分に理解して、その理解の上で受講できるように、説明する機会を充実させることに注力するべきではないかと思う。

2. 今後の具体的対応策など

演習において、発表に対する質疑応答を充実させるためには、一回の授業につき、2名の発表が望ましい。しかしながら定員の上限30名の受講者では、物理的に3名の発表とせざるをえない。そこで、ムードルへ発表資料を事前に提出させることにより、発表前にあらかじめ資料をチェックするようにしている。これは、今後も継続していきたい。

文学史、特講の講義科目については、毎回リアクションペーパーを提出してもらい、学生の反応や関心の在処を探りながら進めている。60名の程度の規模では、すべてに毎回コメントを返すことは困難であるが、できるかぎり丁寧に、取り上げるべきものに関して授業内で紹介するなどしてフィードバックしていきたい。

所属学科 国文学科

氏名 教員②

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

演習科目については、評価が高かったが、講義科目に関しては評価が低かった。演習科目は、学生の発表を受けての指導なので、学生の資質・学力を踏まえて行うことができるが、講義科目はテスト・レポートを通してしか、学生の資質・学力を禁断できないので、それを踏まえて指導することができなかつたためであると推測される。

Q4は講義科目に必要なのか、疑問を感じた。一年次の必修科目については、新入生一人一人を把握するために、全員一度は発表する機会を設けたが、マスクをしていて学生の顔と名前を一致させては把握することは困難であった。また六〇人を超える必修科目では学生同士で議論を行うことは不可能である。特講科目については、講義を通じて知識を拡げ、認識を深めるものであり、なおさら、Q4は無意味であると感じる。

2. 今後の具体的対応策など

自由記述で、必修授業について難解であったとの感想が目についたが、年々低下する新入生の学力に対応した授業を行うように心がけたい。

講義科目に於いても、生の理解度を確認するために、可能な限り、小テストやリアクションペーパーを多用しなければならない必要性を感じた。今回はコロナの影響もあり、Moodle を利用して、二三試みたのみであったが、次回は授業の都度確認するようになりたい。

すべてがハイフレックス授業となったために、教室内と Zoom の双方に対応することに神経をすり減らし、滞りなく授業を進めるのが難しい面もあった。一刻もはやく完全対面授業にもどれればと願う。

所属学科 国文学科

氏名 教員③

2022年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

どの講義においても、学生同士のディスカッションや教員との対話が欠けているという評価であった。この点に関しては、どの講義においてもガイダンスであらかじめ断っていることであるが、講義が古典的な知識の伝授を主とするという特性を有するものである関係上、致し方ないことであろう。

2. 今後の具体的対応策など

一方的な伝授に終始するのではなく、課題の調査結果を発表したり、それに対して意見を述べたりすることができる機会を可能な限り設ける等の努力は、継続して行う所存である。

所属学科 国文学科

氏名 教員④

2022年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

3科目全体を概観すると、おおむね学部の平均と同じ結果が出た。

ただし、第一クォーターの国語学基礎については、Q4「アクティブ・ラーニングの実施」に関する得点が極めて低い。1年次の必修科目のため、どうしても「教える（知識を注入する）」形を取らざるをえず、学生・教員間、および学生間のやりとりが少ない印象が残ったのであろう。

ただし、リアクションペーパーに書かれた質問のうちいくつかを授業時に取り上げ、補足説明を行ってほしいため、その部分はもう少し評価してもらいたいところである。

特講、演習については、Q4についてさほど低い回答とはならなかったが、さらに工夫を重ねたい。

2. 今後の具体的対応策など

必修科目については、「知識の注入」という部分を今後も避けては通れない。知識がなければ議論もできないからだ。ただし、知識ゼロの段階でも具体的な問いに取り組ませたうえで、講義につなげていくなど、動機付けの部分で工夫の余地はあったと思う。

演習については、双方向のやりとりがある程度できたが、参加学生の積極性に依るところも大きい。学生が発言しやすい雰囲気をもさらに工夫したい。また、特講も発表や質疑応答の時間が作れないか、考えてみたい。

所属学科 国文学科

氏名 教員⑤

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

概ね好意的な評価であったと受け止めたが、学生諸君が気を遣ってくれたのかなあ、という気もしなくもない。

漢文学の読み方や面白さを伝えたいという、こちらの熱量は伝わっているように思われた。

課題の解答・解説について、きちんと文書の形にまとめて提示できればよいとは思っているのだが、準備のための時間が不足し、十分対応できない場合があったのは、反省点である。

2. 今後の具体的対応策など

できるだけ分かりやすく、明確な形で課題の解答・解説を示すようにしたい。
そのために、課題の内容・形式、解説の方法についても工夫をしてみたいと思う。

所属学科 国文学科

氏名 教員⑥

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

特講と演習の授業に関しては、点数平均値が総じて学部科目平均値よりも高く、学生が意欲的に授業に取り組み満足していることがうかがえた。「古典文学基礎」という1年生の必修科目では、くずし字を読める力を付けることを目的とするという授業の性格上、Q5～Q7の点数平均値は低めであったが、授業そのものは好意的に受けとめられているようであった。特に、Q13の自由記述で、好意的なコメントが多く寄せられており、くずし字というこれまで触れたことのなかったものが、読めるようになっていく実感を得てくれた学生が多いようであった。

2. 今後の具体的対応策など

これまでの授業方針を継続しながら、新しい方法も模索していきたい。
特に、演習の授業の自由記述のところで、発表資料をプリントで用意するのではなく、Moodleで共有した方がよいのではないかという意見があり、コロナ禍を経て、学生みんながデジタル化に対応できてきているなら、資料等の電子化をもっと進めてもよいのではないかと思った。

所属学科 国文学科

氏名 教員⑦

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

大きな問題は見られないと思われる。
このまま気を抜かずに授業を行いたい。

2. 今後の具体的対応策など

大きな問題は見られないと思われる。このまま気を抜かずに授業を行いたい。
試験時間をもう少し長くとりたい。

所属学科 英文学科
氏名 教員①

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

着任から二年目となって、学生の関心や語学力のレベルを昨年度より正確に把握できるようになり、アンケートの結果も改善したように思える。

特に一年生を対象とする必修科目 Reading and Research は、英語を読む力を向上させることに主眼を置いたものではあるが、扱うテキストの選択がうまくいった。イギリス、ドイツ、フランスを中心とするヨーロッパのロマン主義の芸術潮流について、文学のみならず絵画や音楽にも目配りしながら勉強したことで、狭義の文学にそれほど関心のない学生にとっても「教養」に属する知識を身につけられるとして反応がよかった。

少人数科目である English Studies Seminar は、アンケートの対象科目であることを失念し、授業内で回答する時間を確保することができなかったため、回答人数が少なかった。来年度以降は注意したい。

2. 今後の具体的対応策など

伝統的な英文法の知識を持たない学生が入学していることは自明の前提として、文法用語の使用を避けつつも読む力の育成を重視する授業を構築することが目標である。その際、「ネイティブみたいに」なれることが至上の目標になっている多くの学生にとって、英米の学部生のために書かれたテキストを提示することにより、「ネイティブであればこの程度の読む力があるのは当然だ」と実感してもらおうというやり方が、モチベーションの維持のために有効であることがわかったため、今後も続けていきたい。

英文科の学生であっても、詩や小説の文学テキストにあまり興味のない学生が少なからずいることもまた自明の前提と考えなくてはならない。それでも学問そのものを諦めることがないよう、英語圏の政治や経済に関係する時事問題、文学に限定されない芸術や文化に触れてもらうことで、少しでも大学での学びの面白さを実感してもらえよう努力したい。

所属学科 英文学科

氏名 教員②

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

アンケートの対象となった4科目は、大きく分けて実践的内容のもの (Practice in ELT と Language Studies Seminar) および理論的内容のもの (Principles of ELT, Structure of English) に分かれる。このうち、学生たちの評価が総じて高かったのは前者である。これらの科目では、英語教育の技法と言語研究の方法を学生たちが実践し、省察し、議論し、改善のためのフィードバックをお互いに与えるという学習プロセス全体がアクティブラーニングとなっているため、学生たちの達成感と満足度が高かったと思われる (このうちの1科目は「学生が選ぶグッドプラクティス賞」を受賞した)。それに対して後者は講義型で説明を聞くことが多く、個々で取り組む練習問題は多く用意したものの、やはり主体的・能動的学習とは感じられなかったようである。特に Structure of English は1年生春学期の必修科目であるが、いきなり大学レベルの言語学の用語や概念が英語で多く与えられるため、消化不良であったようだ。

2. 今後の具体的対応策など

課題は Structure of English の改善である。この科目は1年生が100人以上履修している必修科目であるが、コメントの中に「インプットが多すぎる」「説明が分かりにくい」「内容が高度すぎる」という意見が散見された。来年度からは言語学初心者向けの100番台科目であることを念頭に置き、本当に必要な知識に絞り込んで、より丁寧な説明を心がけ、演習問題を増やすことで、理解と定着を高める取り組みを行いたい。

所属学科 英文学科

氏名 教員③

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

少人数の演習科目についてはディスカッションに十分な時間を割きたいところであるが、 Semester制への移行後、テキストの読解（19世紀小説の場合、基本的に400ページ越えがデフォルトである）と批評文献の読解に大半の時間を割かねばならない。同様に少人数の1年次生対象のスキル科目は、年々新入生の原書読解能力が落ちていることは明らかであり、いきおい英文和訳に集中する授業に偏りがちである。昨今の中高における発信型授業に慣れている学生からすると、旧態依然たる授業と映りがちな点は理解している。

比較的人数の多い講義科目については、<講義>という性質上、また受講生の数の点からも、教員と学生、また学生間の相互の意見交換の機会を授業に盛り込むことは難しい。毎回リアクション・ペーパーの提出を求めており、課題としてのテーマに答える以外に、質問や意見など自由に書くことを推奨しているが、その辺の理解が十分ではないと思われる。

2. 今後の具体的対応策など

とりわけ少人数の演習科目については、読解と発表に終始しがちな点を改め、受講生間での意見交換に割く時間配分を考慮した授業設計を立て、毎回の授業に必ずディスカッションの時間帯を設けるようにする。

少人数の英語基礎クラスでは、英語の読解能力の養成と、ディスカッション+プレゼンテーションの効果的な組み合わせを考えたい。具体的には、グループ・ワークの時間帯を増やしていくことを念頭においている。

講義関連のクラスでは、マイクの使い方、声の大きさに関する問題を意識的に改善していきたい。ここ数年、マスクをしての講義が必須となっており、思っている以上に声の通りが悪くなっていることへの自覚が不足していたことをアンケートによって気づかされた。

春学期もコロナ関連の問題により、少数の受講生の希望でハイフレックス型の授業に移行せざるをえない場合が何度かあったが、つい対面型のほうに意識が集中してしまいがちで、途中で慌てて修正するといったことを繰り返してしまっていた。今後ハイフレックス型の授業では、PC上の画面にペンで描き込むという方法を多用していきたい。

所属学科 英文学科 _____

氏名 教員④ _____

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

2 年ぶりの全面对面授業ということで授業運営に教師側も学生側も不慣れな面がないこともなかったが、英語の詩を読むクラスが中心のため、アクティブラーニングを積極的に取り入れ、それが平均値との比較で高く評価されたことは嬉しかった。

2. 今後の具体的対応策など

講義中に教師が迷い、学生も理解に苦しんだというコメントがあった。できるだけ準備をしているつもりだが、どうしても解釈で迷う箇所が出てくることは防ぎようがない。あらかじめ、そのことは学生に通達しておくべきであろう。

また、リアクションペーパーの評価が低いというコメントもあった。こちらは学生に多少の危機感をもたせようとしたつもりである。一方、評価を高めれば学生のやる気を引き出せるかという点、必ずしもそうでもないもので、難しいところであり、今後の課題としたい。

所属学科 英文学科

氏名 教員⑤

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

- 1) それぞれの科目について学生の客観的な意見が聞けて有益なアンケートだと思う。授業の改善に役立つ。
- 2) コロナの状況が学期中に変化して、学期末にかけて休む学生が増えてきたため、教室に来ることのできない学生に向けて Zoom や Youtube 動画を用いた授業も導入した。こちらは、少しでも多くの学生が受講できるように工夫したつもりだったが学生の中にそのような対応をネガティブに受け取っている意見があるのには驚いた。せっかく教室に来ている自分が損をしたとのこと。これには大変驚いた。病にかかってしまった学生に対してケアをする気持ちがないのは大変残念だと思う。上智の学生には競争の中で勝ち上がっていかねばならないとの意識が強いのだろうか。

2. 今後の具体的対応策など

- 1) 学生とのやりとりがどの授業でも少なく、一方的な講義になることも多かった。もう少し上手に質疑応答を取り入れたいと思うものの、つい喋り過ぎてしまう。学生間のディスカッションなど相互発信できるような授業の形を取り入れたいと思う。コロナ禍では、グループに分けてディスカッションする時間を設けるのが困難だったが、次第に環境自体が改善されることが望まれる。
- 2) 質疑応答の時間をとることがあまりできずに、つい一方的な授業をしてしまう。この点は反省したい。

所属学科 英文学科

氏名 教員⑥

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

集計結果のなかで学部科目平均との比較において、ほぼ全ての項目で狙いは達成できているが、ひとつだけ「知的に刺激され、深く勉強したくなった」のみ平均値をわずかに下回っている。1年生の授業とのオーバーラップか、あるいは課題が難しかったとのコメントもあるので、どちらかの要因か、内容に関わる設問なので検討が必要である。

2. 今後の具体的対応策など

結果を踏まえて1年生の他の授業の内容をより詳細に検討し、レベルの調整をはかる。

所属学科 英文学科
氏名 教員⑦

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

設問はおおむね適切かと思うが、例えば 100 人以上の大人数の授業でアクティヴ・ラーニングやプレゼンの機会をひとりひとりの学生に多く設けることや、懇切丁寧なフィードバックを頻繁に行うことは現実的に不可能なので、授業によっては不適切な設問もあったのではないか。

学生のコメントは千差万別だが有用なものもあり、授業改善に役立つ印象である。

2. 今後の具体的対応策など

配布資料の質や配布時期について有用なコメントがあったので改善したい。

所属学科 英文学科

氏名 教員⑧

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

総じて、興味深く受講してくれたようで安心した。Special Topics のような科目ではディスカッションを取り入れていないため、この項目の点数が低かった。

2. 今後の具体的対応策など

古い時代の文章を読むため、内容が難しいと感じる学生が一定数いることはわかったが、今後は、難しい文章をわかりやすく説明できるよう工夫に努めたい。いわゆる講義科目でもディスカッションを取り入れることも今後の課題である。

所属学科 英文学科

氏名 教員⑨

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

いずれのクラスでも、学生にディスカッションをする機会を与える割合が少ないという評価を受けている。講義の授業では仕方がないが、英語の reading skills を養う授業ではもう少しそういった学生が話し合ったり、発話をするなどする機会をとりいれてきたい。

そのほか、これは以前から言われることだが、授業の進度が早いらしいので、その点について注意したいと思う。

2. 今後の具体的対応策など

上に記したとおり、学生がディスカッションをしたり、発話をするなどする機会を今後は多く取り入れていきたい。

所属学科 英文学科

氏名 教員⑩

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

春学期を通じて断続的にコロナ感染及び濃厚接触による欠席者や遠隔出席者が発生する状況だったので、欠席した場合でもフォローアップしやすい授業資料作りを意識していた。それが学生には好評だったようで安心した。

一方で資料作りにはかなりの時間と労力がとられるので、資料の共有が授業開始直前になるなど時間に余裕がないこともあった。紙媒体でなく非接触式の Moodle へのアップロードという形をとっていたので、資料をプリントアウトして授業に臨みたい学生などには不便をかけたと反省している。

授業内でのアクティブ・ラーニングについても、遠隔参加している受講生も不利益なく取り組めるよう、Moodle のフォーラム機能を使ってリアルタイムで意見を投稿してもらう試みを行なった。学生同士で意見を閲覧でき、教員の私もリアルタイムで口頭のフィードバックができる点などが学生の評価につながったようだ。一方でこのアクティビティをもっと充実させてほしいとの意見も見られた。

2. 今後の具体的対応策など

コロナによる欠席や遠隔出席は今後も続いて行くと思うので、春学期のような授業資料作りは今後も継続したいと考えている。授業期間中は常に Moodle にアップしているので、学生も必要な時に適宜参照することができ通常出席の学生にとってもメリットが大きい。ただ、資料作成に時間がかかりすぎているので、その辺りを短縮して余裕を持った資料作成の方法を考えなくてはいけないと思っている。

また、アクティブ・ラーニングに関しても Moodle のフォーラム機能を軸としたディスカッションは維持していきたい。この機能は主に受講者数 50-90 人規模の講義型科目で採用していることもあり、また、ほぼ毎回の授業で遠隔参加者が発生している状況なので、アンケートで希望が挙がっていたような口頭でのディスカッションへと発展させるのは難しい気がしている。フォーラム機能を用いたディスカッションを第1段階、第2段階、第3段階と複数設定することで、議論を進展させるという方法を試してみたいと考えている。

所属学科 ドイツ文学科

氏名 教員①

2022年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

アンケートを実施した授業は講義、語学授業、ゼミ（文献演習）と全て指導形態が異つたため、アンケート結果は概ね想定通りでした。

講義では、アクティブ・ラーニングの機会が毎授業のリアクション・ペーパー及びそれに対する私からのフィードバックに限定されていたため、Q4 の評価が特に低かったと思われます。また、ドイツ語で行われる授業であることから、授業 1 週間前にアップロードされる資料を基に予習をしなかった受講者は難易度が高いと感じたようです。

他の2つの授業では Q4 が高く評価されました。文献演習は、ドイツからの留学生を含め、予想を上回る 50人以上が受講しました。少人数を想定していたシラバス通りに授業を進めることは難しかったものの、グループワークを多く取り入れ、全員が積極的に参加する楽しい授業になりました。語学授業では、他の2つの授業と同様、Q5 の評価が比較的lowかったです。学習した内容が卒業後にどのように活用されるのかを明確に示す必要があるようです。

2. 今後の具体的対応策など

講義をより分かりやすくするために、授業用のハンドアウト（パワーポイントのプリントアウト）を工夫します。授業後は内容を日本語でまとめます。
語学授業は受講者同士でドイツ語を話せる機会をさらに増やします。

所属学科 ドイツ文学科

氏名 教員②

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

2022 年度春学期には語学科目、演習科目、講義科目、3 形態の授業を担当し、今般（クォーター科目を含む）4 科目についてアンケート結果を得た。語学科目（2 年次生対象ドイツ語）は、週 2 回の授業を別教員と 1 時間ずつ分担して担当した。例年よりもドイツ語の基礎力に不足する学生が多く見られたことから、かなり初歩的な事項まで復習、確認しながら、文法知識や作文力の定着をはかった。そのため成績上位の学生たちにとっては、若干物足りない（簡単すぎる）授業内容だったと思われるが、アンケート結果からは高い評価が得られている。とはいえ、授業内でアンケートを実施し、その場での回答を強く要請したにもかかわらず、アンケートの母数が低く、それが結果に反映したと思われる。

演習科目では、学生たちに馴染みのメルヒェン作品を精緻に読みながら、ドイツ語解読能力の充実をめざすとともに、テキストの文化史的背景を探求する授業を行った。学生の評価は比較的高いものの、訳読と解釈が中心で、学生相互での討論の時間を設けることがなかったため、いわゆるアクティブラーニングに不足し、その点は低い評価となった。授業内外で学生と個別に質疑応答する機会は多かった。

アクティブラーニングに関しては、講義科目についてはきわめて低評価となった。終始講義形式で授業を進めたため、学生は受動的態度に終始した。大量の参考資料を講義前に示し、YouTube やテキストファイル、図版を見て、シラバス（毎回の授業内容の詳細を事前配布）に記したテーマについて事前に考えるよう指導はしたものの、それを発表させる機会を設けることはできなかった。結果として学生からの発信の機会を奪ってしまった。授業内容については、自由コメント欄の記述や、授業後の個別の対応でそれなりに高い評価をえたものの、一方向的な授業になった点については率直に反省しなければならない。リアクションペーパーに関しては、質問事項や授業内容で理解困難だった箇所を記入するように伝え、そうしたコメントには次の授業のさいに、説明の追加を行うことで、相互的なやり取りの代行措置としたが、これもまた不十分だったと考えざるをえない。なおレポートについては、すべての答案に、数百字程度のコメントを付して返却した。

2. 今後の具体的対応策など

講義科目に関しても「クリティカルシンキング」の修練に向けて、学生間、学生教員間の意見交換の時間をさらに設ける必要があると考える。今回の授業では、できるだけ多くの「考えるための資料」の提供を心がけ、実施したが、その成果を学生同士で評価し合う機会に不足した。演習科目も同様である。こうした反省を踏まえ、今後、学生⇄教員の一対一の対応から学生間での対話、討議のチャンスを可能な限り増やしていきたい。語学科目については、近年、成績上位グループと下位グループの格差が大きくなる傾向が強まっていることから、今後も学生個々人と、緊密なやり取りをするなかで、最善の語学教育の方策を見出していけるよう心がけたい（もっとも、これには一般化が可能な授業法は存在せず、その場その場での個別の対応を行うほかないと思われるが）。

所属学科 ドイツ文学科
氏名 教員③

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

学生自身が履修科目を選べる選択必修科目よりも、必修科目の運営方法にさらに工夫が必要であると感じられる。特に 1～2 年次までの専門語学の必修科目は、週 6 コマの連携によって 3～4 年次の専門研究に必要な運用能力を身につけるカリキュラムであるが、少なくとも一部の学生には、目の前の習得すべき課題やそのための予習に追われる感覚にとらわれて、モチベーションを見失いがちになっている状況が推測される。授業やテキストの難易度とその運営方法について再考の余地がある。

2. 今後の具体的対応策など

特に学生自身が履修科目を選べない必修科目においては、特定の習得目標に向けてできるだけ多角的なアプローチを提案し学生自身が自由度を保ちながら取り組めるような課題設定をより工夫していきたい。専門語学の必修科目の場合は、他教員との連携により多様な教材と方法で習得させていくことが可能ではあるが、個別の授業内においても受講生の多様なモチベーションのあり方に応えられる工夫を試行していきたい。

所属学科 ドイツ文学科

氏名 教員④

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

教員の説明の明瞭さという点や、意欲、フィードバックという点に関して「5」あるいはそれに近い評価があり、また知的な刺激という点においても、同様に高い評価がされており、それ自体については教育の目標及び方法設定において、適切であったと考えている。

2. 今後の具体的対応策など

基本的には、今後も肯定的に評価をもらっている部分について、レベルを保つように授業運営を進めていきたいと考えている。ただし、Q5の卒業後に応用させられるような学びという点のみ「4」をきっている科目がある。これは、質問の書き方から、社会に直接生かされる実用的な知識を前提に学生が回答をする可能性が高いので、正当に数値として出されているかどうか判断しがたいものの、今後意識的に教員から、しっかりと学生に「伝える」ことも授業内で行うべきことであると改めて考えた。

所属学科 ドイツ文学科

氏名 教員⑤

2022年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

科目（例えば、語学科目など）によっては、授業の趣旨に合わない評価項目があると思いましたが。学部科目平均値を下回る項目が多かったため、可能なかぎり、評価を上げるための努力はしていきたいです。

2. 今後の具体的対応策など

科目によってはフィードバックの時間を取りすぎたものがあったため、その点は今後の改善点としたい。また、個々の科目で修得したことが在学中にどのように活かされるのかについての説明もしていきたい。その他、各質問項目での評価が上がるように、可能なかぎりの努力はしていきたい。

所属学科 ドイツ文学科

氏名 教員⑥

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

いずれの授業についても教員の熱意や授業の理解度については評価が高く、学生が授業全般については満足していることがわかった。

質問項目の中で全体的に評価が低かったのはアクティブラーニングについてである。

専門のドイツ文学の授業に関しては学科科目平均値よりも高く、これまでの方法が適切であるとは思いますが、よりよい方法をさらに考えていきたい。

語学（文法）の授業に関しては、アクティブラーニングという観点が適切であるのか現在時点では疑問を覚えるが、さらにこれについても考えていきたいと思う。

2. 今後の具体的対応策など

語学の授業のアクティブラーニングについて、文法・読本・会話の3つの授業を関連させて学生が体感できるような形を考えていきたい。

所属学科 フランス文学科

氏名 教員①

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

確かに、「特修フランス語」の授業に不満があったという学生のコメントを読みました。このクラスは、学生一人一人がプロレベルのフランス語で3つのビデオプロジェクトを完成させるというプロジェクトベースのクラスなので、彼女のフラストレーションはよくわかります。学生のプロジェクト遂行に同行しています（プロジェクトの企画、フランス語や発音の添削）。このような授業は日本では普通ではありませんし、海外に行ったことのない学生にとっては、演習に対応するのは非常に難しいことです。

2. 今後の具体的対応策など

私たちは、中学校で教わるように言語を学びます。大学レベルでは、他の学習方法を提供することは困難です。ですから、たとえ一部の学生が特別に優秀であったとしても、このような指導はあきらめる覚悟でいます。だから、古典的な授業形態に戻るべきだと思います。学生の反応は、クラスごと、年ごとに非常に異なるのですから。私にとっても、学生にとっても負担が少なく、みんなが満足できるものになると思います。

所属学科 フランス文学科

氏名 教員②

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

大きく平均値を割り込んでいるような項目はなかったが、学生の理解度を確認するような教員からの学生への質問や、対話に欠けるところがあったかと思う。
また授業内容により、プレゼンテーションやディスカッションがそぐわないと決め込んでいたところもあるかもしれないと感じた。

2. 今後の具体的対応策など

学生の理解度、疑問の有無などを確認する機会を設け、学生の発言を引き出す工夫をしたい。
授業内容から言って、学生のプレゼンテーションやディスカッションが入れ込みづらいと決め込んでいた授業（たとえばフランス語文法などを教えるような内容）であっても、工夫して、学生の自主性を引き出すように努めたい。

所属学科 フランス文学科

氏名 教員③

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

受講生が授業の成果を吸収できたことが伝わってきた結果からは、どのような授業の工夫が効果をもたらしたのか理解できてよかったと思います。逆に一部の意見からは、授業内容や授業の工夫が必ずしも伝わらなかった点もあることが理解できました。語学概説や文学研究に関してはあえて、トピックに関する教員の知識や理解を解説するだけでなく、テキストを新しい見地から受講生と一緒に探求するスタンスをとりました。そのような授業方針は重要なものだと考えていますが、あらかじめのコンセンサスとさらなる工夫が必要だと感じました。1年生のフランス語授業については、進行が早いという意見もありますが、文法を一通り1年で終わることがフランス文学科の方針ですので、ていねいな予習復習が必要であることを今後も周知し、フォローを徹底していきたいと思えます。

2. 今後の具体的対応策など

教科書がある授業に関しては必ずしもパワーポイントを配り直す必要を感じませんでしたが、レジュメや資料がないと復習しにくいという意見もありましたので今後はこまめに資料を配布するようところがけたいと思います。また人数の多い授業では発表の順番などの整理に混乱が生じることがあったため、今後は予定管理をさらにしっかり行っていきたいと思えます。

所属学科 フランス文学科

氏名 教員④

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

フランス語の必修科目について、小テストが多いというコメントがかなりあった。語学の習得のためには必要だと思って、日程は教室で相談しながら実施していた。

2. 今後の具体的対応策など

小テストは有効に機能していたが、ついてこられない学生がいたことも否定できない。あまり過酷な日程にならないように学生と話し合いながら進めていく。点数の低い学生には、どういう事情があったのか、確かめながら対応策を考えていく。

所属学科 フランス文学科

氏名 教員⑤

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

熱心に受講してくれている学生の姿が見え、こちらもさらに充実した授業ができるよう意を強くした。講義内容の説明の方法に関して、昨年より丁寧にすることを心がけた結果、理解が難しいという意見は幸い全くなかった。フランス語に関しては昨年に比べ授業相互間の連携について改善したが、それでも連携の不十分を指摘する声があった。

2. 今後の具体的対応策など

ディスカッションはコロナの感染リスクを考えるとどの授業でも基本的に行わない方針であったが、評価項目となっており、またこの点を指摘するコメントも存在していたため、感染の現状を鑑み、今後はより積極的にディスカッションを実施しようとする。フランス語については、現状よりも連携を強化すると各教員の自由度が低下し、個々の授業の質低下など、別の問題が生じてくる可能性がある。しかし、一度学科で議論は行うべきだと考える。

また、アンケート解答率が悪かったためより回答しやすい工夫も試みたい。

所属学科 French Literature

氏名 教員⑥

2022年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

The general impression is quite good for the entire set of classes. There is only one point to be improved in the immediat: it concerns classes HFL 57400 and HFL57500 and the question number 4: « there were opportunities for active learning, such as presentations and discussions among students)

The problem is the following: the class has an extremely high number of students (about 60). There are big classes: THEY ARE THE TYPE OF CLASSES THE SOPHIA ADMINISTRATION WOULD LIKE TO IMPROVE IN THE FUTURE (LARGE NUMBER OF STUDENTS) FOR ONLY SO-CALLED FINANCIAL REASONS (BUT SOPHIA IS WASTING MONEY ON PURE SUPERFICIAL WORKS ON THE MAINSTREET IN THE MEANTIME, AS PUTTING THE LOGO IN THE MIDDLE OF THE MAINSTREET, THE LOGO BEING ALREADY CRACKING AND ERASING TWO YEARS AFTER THE WORKS).

- AS WE CAN SEE, PRESENTATIONS ARE NOT POSSIBLE IN SUCH HIGH NUMBER CLASSES AND THEREFORE ARE LESS SATISFACTORY ON THE POINT OF VIEW OF THE STUDENTS.

WOULD SOPHIA ADMINISTRATION OR MANAGEMENT TEAM RECOGNIZED THATOR EVEN TAKE THIS FEEDBACK INTO CONSIDERATION? , ONE WOULD WONDER .

2. 今後の具体的対応策など

For most of the classes, it could be a good improvement to stress the connections with other classes, and to show more specifically the relations with extra-university realities and how things learned inside the class can be used in futur professional life

所属学科 新聞学科
氏名 教員①

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

大教室の授業でも、学生たちは、他の学生と意見交換、議論し、発言する機会を肯定的に捉えていることが、自由記述の回答からわかった。授業の進度は遅くなるが、学生たちが他の学生の視点を通して授業内容を咀嚼し、視野を広げられるという点で、学生間の交流や発言の機会は、重要であると改めて感じた。学生が、授業に参加しているという感覚をもつことは、学習意欲や知的好奇心を高める上でも重要である。

数は少ないが授業内容が難しいとの記述もあった。学生間の能力差、授業への向きあい方への違いがあるなか、どの学生も取りこぼさない授業を行うことも難しいように思うが、学生間の議論や発言の機会を増やしていく中で、改善に努めたい。

アンケート回答者の割合が全般的に低かったのが残念である。

2. 今後の具体的対応策など

どの授業でも、学生同士のディスカッション、発言する機会は設けているが、アンケート結果を受けて、今後、一層、こうした機会をつくっていきたいと考えている。小さい規模の授業に関しては、来年以降すべての授業で、グループによるプレゼンテーションを取り入れていきたい。学生の考えを深め、自ら学ぶ意欲を喚起できるような授業にできるよう今後とも努めたい。

所属学科 新聞学科

氏名 教員②

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

総じて高い評価を受けているように感じた。

2. 今後の具体的対応策など

今後もこれまで同様に授業に取り組んでいきたい。

所属学科 新聞学科
氏名 教員③

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

就任してから初年度の授業でしたので、ちょっと不安不明なところがありました。シラバス作成の際に、学生の状況や響きがあまり想像できず、蓋を開けてみたら、レベルの高い受講者とギリギリで理解できた受講者の間のギャップが大きかったです。そのために、期待できるが、要求ができない状況がありました。わりあいで学生は響いてくれたので、受け答えもよかったし、反応も良かったと思います。

やっぱり学生は宿題とか無理しても完成する方針で、課題が多くて、苦勞させたかなとちょっと悔しいです。もうちょっと優しくしたいと思います。

2. 今後の具体的対応策など

- ・慣れてきている状況の中で、授業プランをきちんと実施し、計画し、できる子とできない子とのギャップを埋めたいです。
- ・宿題・課題は少し減らし、個人作業・グループ作業に時間を頂き、会話の方に焦点をあて、現場に言いたい、伝えたい、述べたいことを表現できるような機会を設けたい。
- ・教員として欲張りをやめ、「できることができる、できないことはできない」ことに納得したいと思います。

所属学科 新聞学科

氏名 教員④

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

新聞学科のカリキュラムは、理論と実践を架橋する形で編成されているのが特色である。本アンケートについては、回答者数が少ない科目も少なくないことを前提にしてだが、担当する科目の中で、実習系科目や演習科目の評価(ポイント)が総じて高く、理論系の講義科目の評価(ポイント)が低い傾向にある。これは質問項目において、実習系科目や演習など、アクティブラーニングや学生間の議論を、より積極的に評価するためと思われる。回収率のアップが前提だが、個別科目の検討とともに、新聞学科科目全体を俯瞰する形でのアンケート結果の検討が必要と考えられる。

2. 今後の具体的対応策など

まず、アンケートの回答率のアップに努めることが肝要と思われる(ただし、これまでも教室でアンケートの協力は、呼びかけている。)その上で、カリキュラム編成全体のかでの結果分析と、結果の科目間の関連性を検討するべきではないか。

所属学科 新聞学科
氏名 教員⑤

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

- ① 受講者の習熟度を授業開始時に把握できていなかったと思われる。
特に、上智の受講生が、具体的な事例に対しての理論的な抽象化がどのくらい可能な
のかが、把握しきれていなかった。
- ② 受講者の習熟レベルに合わせて、到達点の再調整機能を柔軟に発動する必要があった
こと。
- ③ 時間配分に苦しめられた。
特に、授業の準備や片付けにかけられる時間が、
時限間の休み時間しかなく（教室の空きがない）、
アクティビティーの限界があり、それが、上智の時間割でやれる授業は、
自然と制限（アーキテクト的な制限）がかかることを十分に把握できていなかった。

2. 今後の具体的対応策など

- ① 授業冒頭で、受講生の習熟度やレベルを把握するためのアンケートなどを実施。
- ② 全体をモジュール化させて、途中で到達点や目標を調整できるような、カリキュラム
の区切りかたを細分化させる。
- ③ 上智の教室設備リソース内でやれることを熟考し、
授業のサイジングを、簡略化とシンプル化を行う。

所属学科 新聞学科

氏名 教員⑥

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

- ・アンケート実施日に学生たちへの回答呼びかけが不十分でありその結果全体的に回収率が低くなってしまったことが反省点としてあげられる。
- ・受講者の多い科目に関してはリアクションペーパーへの回答に毎回時間を割くことで一方向の授業になることを避けようとしたが、その効果は一定程度上がったように見える。
- ・学生同士のコミュニケーションの促進という観点からの工夫が足りなかったと反省した。

2. 今後の具体的対応策など

- ・アンケート実施日に学生への回答呼びかけを徹底したい。
- ・リアクションペーパーに書かれる意見や質問の内容についてはある程度蓄積ができてきたので、FAQ的な形でまとめることが可能な内容に関しては、Moodle 掲出するパワーポイントの中に書き込むようにしたい。
- ・多受講者科目においても学生たちが「主体的に取り組んだ」という感覚を持てるようにするため、アクティブラーニング的な要素を盛り込み、コロナ感染状況なども睨みつつ授業中に学生同士のやり取りをする時間も設けたい。

所属学科 新聞学科

氏名 教員⑦

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

コメントから、時事的な話題や事例を扱うこと、実践的な授業を行ったことを評価する傾向が見られました。ディスカッションを積極的に行ったり、役に立つ技術を身につけたりする講義の方が高く評価される傾向が見られ、アクティブラーニングに対するニーズが高いことも改めて認識しました。

講義によってアクティブラーニングの量が大きく異なったため、バランスをとることが課題だと思いました。

2. 今後の具体的対応策など

今後はアクティブラーニングの少ない講義でその割合を増やし、より実践的な取り組みを増やすこと、また、課題に対するフィードバックをより積極的にすることで、より能動的な学びを実現できるように、講義の運営方法を調整していきたいと思います。

所属学科 新聞学科

氏名 教員⑧

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

全般的に、教員の印象と学生の感想が一致している。

オンライン期間の経験から、ときどき紙で提出させていたリアクションペーパーを、電子ツールで毎回とるように変更、その都度フィードバックしたり、掲示板で事前に議論した内容でライブのディスカッションを行うなど、授業の進め方を工夫したことがよく受け入れられている。

回答者数が少ない授業（とくに少人数科目）については検討が必要である。

2. 今後の具体的対応策など

積極的にディスカッションを導入していない大人数科目についても、インタラクティブな要素を足していきたい。秋学期において、リアクションペーパーをまとめて配布共有するなど新しい取り組みもしているので、その結果にも関心がある。

演習系の科目（デジタルアーカイブ論）は、今年度についてはあまり反応が芳しくなかった印象がある。従来は自主的にさまざまな資料を探索していく様子があったが、ミスマッチが起きないようにシラバスの記述をもう少し具体的にする予定。

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

実践形式の授業が多いため、どうしても個々の学生たちと個別にかなり密なやりとりをすることが必然的に多くなります。特にテレビ番組制作やドキュメンタリー制作の授業では、当初の企画やアイデアの段階、番組の流れや構成を決めていく段階、収録や編集の段階など、それぞれの段階に応じて学生の自発的なアイデアや計画について問い、引き出して実行してもらうような指導しています。指導に関しては通常の授業における他の教員に比較するとかなり厳しいものになっていると思います。

そうしたなかで、教員に細かく相談しながらも自発的に作業を進める学生とどちらかといえば作業を後まわしにして教員に相談せずに進行が遅い状態の学生とでは、前者に対して指導の時間をかけることが多く、後者に対しては「ここままだと授業目的を達成できない可能性がある」と警告しながら進めるようにしています。

こうした姿勢が学生によっては、「自分に対して厳しすぎる」とか「特定の学生だけひいきしている」などというふうに映っている可能性があると感じました。

なるべく、学生によって対応を変えないようにできるだけ丁寧な指導に努めて、今後いつそう注意しながら、指導していきたいと思っています。

2. 今後の具体的対応策など

- ・各授業の始めの時期に授業の目標や計画などについて誤解がないように繰り返し伝えるようにします。
- ・遅れ気味の学生に対して、こちらから心配している旨の「声かけ」などをもっと頻繁に行うようにします。
- ・特にグループでの作品制作などでは、熱心で作業量が多い学生と熱心とは言えない学生との間で、作業の状況に差が出てしまいがちです。グループの一体感を重視させてなるべく、班分けの段階から個々の学生の性質や意欲、能力の差がつかないように配慮して工夫してみます。

所属学科 文学部
氏名 教員①

2022 年度春学期授業アンケート

1. 結果を受けてのコメント

大人数での教養科目的な講義であるため、Q4の設問はこの科目についてはそもそも該当しないであろう。とりあえず生半可に聴講していた大学の講義が、ずっと後になって役立つことがある、というのが総合大学の一般科目の利点であるので、近視眼的な評価は余り意味がないのではないか。

もともと素質・学力の面において十分なものを具えている本学の学生に対して、日本美術史の見方を知ってもらい、基本的な知識を与えて、卒業後の人生や仕事で役立ててもらうことを目的にしているのので、半年の講義のどこかに印象に残る場面があれば幸いである。

2. 今後の具体的対応策など

コロナ下のリモート講義のなかで苦肉の策としてスタートした Moodle のコメントを集めるという方式がたいへん有効であることが分かったので、大いに活用している。出席票の裏面肉筆コメントでは、簡単に整理できなかった情報が、すぐに集計できてリアクションにつなげられる点で、受講生の満足度も高いようである。

最近の学生は講義の中で自分の名前が読み上げられるようなことを極度に恐れる風潮があるようで、コメントのリアクションについても、名前を挙げることを止めたが、それで安心して自由な意見を送信してくれるようになったように思われる。